



佐野短期大学学報

か た く り



ACCREDITED
2005

発行/佐野短期大学

栃木県佐野市高萩町973

電話 (0283) 21-1200

新春

福祉用具試作品 (介護福祉専攻2年)

最優秀賞



「分けま銭か？」
高瀬 佳子



優秀賞



「多機能車椅子カバー」
阿部 美穂



佳作



「ペット one hand」
茂田千恵美



「らくらくエプロン」
梨子本朱里



「楽々食事セット」
若林 裕香

年 頭 の ご 挨拶



より豊かな知性を

理事長・学園長 池田 健次

新年あけましておめでとうございます。

平成の時代に入り、19 回目の新年を迎えました。昨年は「美しい国日本」という言葉がクローズアップされました。一方眼を覆いたくなるような事件・事故が多発しました。その中で特に心痛む出来事は、家庭内での忌まわしい事件であります。言葉にするのも躊躇うような親子間の殺人、児童虐待等々は現代社会の病巣を象徴的に表わしています。

最近、ペットとして犬や猫を飼う家庭が急激に増えているとのこと。犬は生まれてから 5 週間たないと親から離さないと聞いています。この 5 週間はその間に生きていく術を教える大切な時間です。私たちの身近にいる動物は、いずれも親の子に対する愛情のかけ方の原点を表現しているように思います。

少子・高齢化社会で進む核家族化は、家族間の人間関係や生物として避けられない老化に伴う諸問題への関わり方に大きな変容を与えています。兄弟姉妹との成長過程で、日常的に繰り返される多くの確執や、祖父母等の介護を通して心の絆を感じる機会も少なくなりました。

今、流行のゲームソフトでの疑似体験と実体験の乖離の危険性すら認識できないままに、虚像と実像を区別する能力を持たない時期から受け入れて成長する子供たち。これらも技術革新、そして倫理性を失った商業主義の成せる業であると思います。私たち大人が次世代を担う子供たちに何を与え、何をさせるかをそろそろ真剣に考える時期にきています。

「心の教育」の重要性が叫ばれて久しく、その根底にあるものは豊かな知性であります。豊かな人間性に培われた知性を身につけることが、他者への思いやりの心、周囲への感謝の心、生命への慈しみの心、自己実現への強い意志など人が人として生きる力を育む素地となります。その手法の一つが、経験や体験の場を数多く提供し、それらを通して成長年齢に相応しい精神的成長を促すことです。

本学園は「人づくりの佐野日大」を標榜し、短期大学、高等学校、中学校において真摯な教育活動を展開し、広く地域社会より高い評価を受けていますが、今年も更なる成長を目指して邁進したいと考えていますので、存分のご協力をお願い致します。



家庭教育が社会を変える

学 長 谷 島 一 嘉

あけましておめでとうございます。

本学も 16 年が経過し、次の 20 周年に向けて更なる飛躍が期待されます。少子化による学生数の減少は特に短大に厳しく、本学も今後ますます進む厳冬の時代の生き残りに必死に努力しなければなりません。教職員が本当に一丸となって学生を確保し、しっかりと教育をしていかなければなりません。学科の壁がなくなりつつあり、教職員は佐野短大の一員であるという機運が出つつあることは非常に喜ばしいことであり、皆様のご協力を心から感謝しております。

昨年暮れはもっぱらマスコミ関係では教育基本法の改正問題、いじめや自殺の問題が大きく取り上げられました。親による自分の子供の虐待で幼い子の命が次々と失われる報道も相次ぎました。突き詰めれば、自分の子供にきちんとした家庭教育をしつけていない、あるいはできない親が最近が増えているということです。

自分のことを棚にあげてなんでも学校のせいにする、人のせいにする、そんな人が増えてしまっているし、マスコミがそれをいかにも正義のように伝える、なぜ日本はこうもモラルが低下してしまったのでしょうか。

大切なことはこの現状をどうすれば良い方向に変えてゆけるか、ということです。親が自分の子供に家庭教育をきちんとしつけることができれば社会は変わってくるでしょう。

本学で行っている「自分の頭で考える教育」はようやく具体的な成果を上げてまいりました。自分の頭で考えて行動を決めることの大切さを実感する学生達が増えました。とても心強いことです。

このような学生達が親になったとき、本学で学んだ精神を自分の子供に受け継がせてゆく、その子供たちが核になって今後の日本を築いてゆくのです。我々はそういう青年を育てているという誇りを持ち、佐野日本大学学園とともに、本学も発展しましょう。皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

第 3 回 読書・映像感想文コンクール入賞者

読書部門 「1リットルの涙」を読んで

介護福祉専攻 1 年 杉谷 宗昭

「どん底にいる。だけど不思議に、死にたいとは思わない。」もしも自分が亜也さんのような状況下なら、この言葉は出てこないだろう。ほんの数年前まで健康で、まわりの友人と同じだったのに、今までの“当たり前”が当たり前に来ないということだけでも、これからの人生に魅力を感じなくなってしまうと思う。ただでさえ中学、高校と精神的にも不安定な時期であり、些細なことでも深く悩んでしまいがちなのだが、彼女は本当に強い人間だと思った。

“今”を精一杯の気持ちで日記に綴っている亜也さんと年齢的にも近く、まわりの環境などを自分と照らし合わせることができ、彼女の素晴らしさが伝わってくる部分があつた。さらに日記だからこそ書けるユーモアのある表現で、難しい語句や慣用句は使われていないため、とても読みやすかつた。

学校生活において教室移動は付き物であり、休み時間の 10 分間で移動しなければならないこと。ホームルームの時間、弁当の時間、放課後……。学校で集団生活する上で守らなければいけないルールや、日々の生活の 1 コマ。自分にとって何気なく過ごしてきた時間は、亜也さんにとっては苦痛な時間になっていた。まわりは健康な人間ばかりなのに、なぜ自分だけ？と、屈辱感が湧いてくるのは当然だ。そんな時手助けしてくれる友人たちの存在は、何よりも心の支えになる。友の優しさを素直に受け止めつつ、自らに残存している能力をフルに生かし、前向きになろうと努力する意思には感心した。

「みんな違ってみんないい」金子みすずさんの有名な詩であるが、もし、自分の将来に不安を感じている亜也さんにひとつ言葉を贈るならこの言葉を贈りたい。まわりの人間より身体が弱くても、良いじゃないか!! 亜也さんには強い心があるじゃないか!! と元気付けたい。青春の真ん中で、自分が彼女の立場なら学校に行く気も無くなり、これからの暮らしに絶望してしまうだろう。しかし彼女の強さは、自分とは比べものにならないし、意思は尊重すべきなので、激励したい気持ちに自然になっていく。

亜也さんの人生をいつでも支えていたのがお母さんだ。彼女の存在は亜也さんにとって一番大きいと思う。お母さんが亜也さんにかける言葉の全てが、亜也さん

を想つての言葉だつた。自分の娘が、深刻な病気の患者と分かつたときは、自分のことのように苦悩するはずだ。しかし、冷静に受け止め、症状が進行する娘に対して常に的確なことを言うお母さんはさすがだと思つた。親に対して反抗もせず、素直に相手の気持ちを大切にし、強い意志で今を生きていこうとする亜也さんの精神は親から譲り受け、培われてきたものだと思う。

亜也さんの人生は短かつた。しかし、彼女はしっかり生きた証を残している。身体の状態がどうであっても、14 歳から続けている日記を書くことを忘れない。1 日 1 日を大切にすること。生きていることがどんなに素晴らしいことなのか伝わってきた。

将来にどんなに不安を感じても、今を懸命に生きることを最期まで忘れてはいけないということを亜也さんは、一番伝えたかつたのではないか。

「どん底にいる。だけど不思議に死にたいとは思わない。」自分がどんな困難に陥つても、この言葉を胸を張つて言えるように、日頃の生活を充実させ、目標を持ち生きていくことが大切だと思つた。

【読書部門】

◎最優秀賞

「1リットルの涙」を読んで

介護福祉専攻 1 年 杉谷 宗昭

◎優秀賞

「生きながら火に焼かれて」を読んで

英米語学科 1 年 森 句美子

「ナポレオン」を読んで

社会福祉専攻 2 年 荒川 卓己

「1リットルの涙」

介護福祉専攻 1 年 中島 朋美

◎佳作

「聖書」を読んで

英米語学科 1 年 新井 由佳

「Speaking に向かう妥当性」を読んで

英米語学科 1 年 新井 敦子

「1リットルの涙」

介護福祉専攻 1 年 平岡 三季

【映像部門】

該当作品なし

◎特別賞

A Rose for Emily by W. Faulkner

『エミリーへのばら』

英米語学科 2 年 山中 朋美

短大トピックス

WORLD PC EXPO 見学 (経営情報科1年)



10月18日(水) 東京ビッグサイト

ボキャブラリーコンテスト (英米語学科)



11月2日(木)

佐野市・佐野短期大学 地域連携協定調印記念講演会 開催

テーマ『現代の青少年と教育問題を考える』



1部 11月17日(金)

川田 龍平先生 (松本大学非常勤講師)

講演タイトル

「現代社会を青少年は如何に生きるか」

川田先生は血友病治療のための輸入血液製剤によりHIVに感染し、国と製薬会社の責任を問う東京HIV訴訟の原告団に加わり、その後活動の幅を広げて人権問題や性教育などをテーマに講演活動をされています。本講演会でも、HIV感染者への差別と理解、国の報道の姿勢について実体験を話していただき、命・平和・人権などについて考えさせられる内容でした。



2部 11月30日(木)

水谷 修先生

講演タイトル

「子供達を子供達の明日へ」

佐野市文化会館大ホールにおいて、「夜回り先生」こと水谷修先生による講演会が実施されました。

当日は、われわれの身近に在りながらあまり知ることのない「青少年の夜の世界」についてのお話を受け、10代、20代の若い人たちははじめ約1000名の参加者が、それぞれの思いを胸に家路についたのではないのでしょうか。

弔事

謹んで哀悼の意を表します。

佐々木 茂 (非常勤職員・管理室) 12月16日(土) 逝去

学報編集委員

松崎宣子・佐藤秀一・立川聡子・大熊信成
和田晴美・新井文子・山内健次・高橋登美子
藤田 睦・大橋義成・齋藤 彩